The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	鏡と太陽信仰 : 東アジアの鏡の図案より
Author(s)	大形, 徹
Citation	中国研究集刊. 2009, 48, p. 1-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61001
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊 麗号（総四十八号）平成二十一年六月 一―三〇頁

鏡と太陽信仰
― 東アジアの鏡の図案より ―

大形 徹

はじめに

古代エジプトの新王国時代（前一五七〇年頃～前一〇七〇年頃）の隼をあしらった鏡（図1-1（注1））は商の建国（前一四〇〇年頃）よりも古いものだが、「太陽円盤の形（注2）」とされる。太陽はエジプトの宗教の根源にある。西に沈んだ太陽は地中を旅し、東の空から再び昇る。そのことをミイラとなった死者の復活再生観念と重ねあわせた。太陽こそが復活再生の象徴なのである。そう考えた時、太陽の形をした鏡は、たんなる意匠、たんなる化粧道具とはみなせなくなる。

中国では最古の斉家文化（青海省、前二〇〇〇頃）の鏡の文様（図1-2（注3））が太陽を象るようにみえる。商周時代は鏡の出土例は少ない。その後、戦国時代から増加し、漢代には各種各様の意匠のものが作られる。当初、鏡に銘文はなかった。しかし、「漢日光鑑」から「見日之光」という銘文が多数現われる。「太陽の光を見れば」の意味で、鏡と太陽の関連を示す。「與天無極、如日之光、長未央（注4）」は、太陽の光のように長い寿命を持つという意味で、沈んだ太陽が翌朝、また昇ることの繰り返しが永遠に続くことをいうのだろう。徐乃昌は、「漢日光鑑」の一一八（図1-3（注5））に「背中作日形、光芒四射、圍以八角花」と、背面が「日形」つまり太陽を象るという解説を加え、鏡の文様と太陽を結びつけている。ところが、中国や日本の考古学では、鏡と太陽を結びつけて考えることはあまりされておらず、むしろ、星と結びつけられこ

とが多い。拙稿では、中国の古代の鏡もまた太陽と深く結びついており、それが当時の死生観や葬制とも深く関わっていることを明らかにしたい。

中国には十日神話がある。これは太陽が一〇あるとするものだが、中国以外にまで広げると数は一〇とは限らない。また馬王堆帛画に表わされるものは、大きな太陽が一つ、扶桑の花から生まれ出る小さな太陽が八つある（図2-1, 2(注6)）。花はエジプトの睡蓮に淵源を持つパルメット文様（図4-16(注7)）であり、前五～三世紀の中央アジアのパジリク(Pazyryk)にもその文様（図4-17(注8)）がある。鏡には数多くパルメット文様が使用され、また従来、葉と名づけられていた四葉文（図5-3）も実はパルメット系列の花である。複数の「太陽」と「花」という観念で鏡を見ると、これまで幾何学文様とされていた円弧・小円・半球なども太陽の形と結びつけることが可能ではないだろうか(注9)。円弧は「連弧文」、小円は「連珠」「乳」、半球は「鈕」である。

一、エジプトの鏡

新王国時代の鏡について、山花京子氏は以下のように述べる。

鏡は古王国時代から存在が知られており、高位の女性の身づくろいには欠かせないものだったようだ。鏡は少し楕円に近い形をしているが、これは太陽の形を模倣したものとも言われている。柄の形はロータスの形をしているものが多く、柄と丸い鏡を合わせて宗教的なモチーフ「ロータスの花から太陽がうまれ出る」を表現しているため、鏡は単なる実用品ではなかった(注10)。

ロータス(lotus)は睡蓮のことだが、太陽の動きに合わせ、夕方には花を閉じ、水の中に入って睡(ねむ)るかのように潜り、朝には水から顔を出して花を開く。太陽を象徴するとみなされ、ミイラにも捧げられた。ミイラの再生を促すと考えられたからであろう。睡蓮は文様化されるが、それをパルメット文様と呼ぶ。それは世界各地に広まり、北方の遊牧民のバディリクの遺跡にも見え、中国にも入り込んでいる。中国では芝草と呼ばれた。芝草は当初は茸ではなく花の形である。不死の仙薬とみなされたのは、睡蓮の持つ再生観念に基づくのであろう。四葉文など蓮に基づくとされる文様も、蓮と睡蓮の近縁性から、睡蓮の持つ宗教的意味が蓮へと引き継がれたのだろう。印度における蓮の重視も同様の展開を辿っているようだ。

「睡蓮から太陽が生まれるという宗教的なモチーフ」

は、ミイラの復活再生観念と繋がると思われる。ミイラを復活再生させるために鏡を副葬したのであろう。

前掲の隼をあしらった鏡(図1-1)に以下のような説明がある。

…花のように張り出している柱頭の各先端には、ハヤブサが止まり、外側を向いている。もともとは生活用品として作られた化粧用具類と同様に、鏡もまた、性と復活の象徴に強く結び付き、死後の生活でも特別な使途があった。ヒエログリフの〈アンク〉は「生命」を意味し、サンダルの革紐の形からきているというのが一般的な解釈だが、T字形の柄が付いた鏡を象形しているとも考えられている。パピュルスそのものにも新生と再生という意味がある。ハヤブサは太陽神の姿を表しており、これもまた太陽が日々夜明けに再生するという考えに深く結び付いている(注11)。

鏡に隼が表現され、それを太陽神と見て、「再生」観念と深く関わるという。隼は死者の魂であるバー(Ba)とも関わる。バーは太陽の中に入って復活するとされ、やはり復活再生と関わる。アンク(図1-6(注12))は「生命」を象徴する記号だが、その形が鏡と類似し、関連するという説も興味深い。

エジプトの鏡は柄鏡で鈕がない。正円形(図1-5(注13))のものもあるが、やや扁平になった楕円形で、中国のものとは同じではない。背面は問題にされず、恐らく文様はない。鏡はたんなる化粧用具ではなく、死者の再生復活のための道具でもある。これは中国や日本の鏡の副葬の事例を考える上で示唆を与える。

二、陽燧と陰鑑

鏡と鑑

鏡鑑と熟語にされ、混同されるが、本来、「鏡」と「鑑」とは別である。「鑑(監)」は水を張って顔をうつす容器(図1-7(注14))。甲骨文(図1-8(注15))や金文の字形は人が水を張った容器を覗きこむ様子。春秋時代に青銅製の「鑑」も作られた。「鏡」の文字は「鑑」よりも新しく原形は「竟」である。「竟」は「景」とされ、「影」である。これは面影で、姿を映すところからの命名であろう。

陽燧と陰鑑

凹面鏡は陽燧と呼ばれる。太陽光を集め、火をとる道具である。東北アジアに多い多鈕細文鏡は凹面鏡で、日本にも二種類ほど遺物がある。中国の戦国時代の葉脈紋双鈕鏡も鏡面がやや凹んでいる(注16)という。これらは倒

立する像を結ぶ。

遼（契丹族）の陳国公主の墓（一〇一八）の遺物に携帯用の陽燧（図1-9(注17)）があり、太陽から火をとるために使用されていたようだ。この墓からは青銅鏡（凸面鏡）も出土しているが、鏡面が鍍銀され、顔を映したのだろう。陽燧と鏡は使い分けられていたと思われる。

陽燧は凹面にあたった太陽の光が反射して焦点を結び、艾を発火させる。これを卜骨や亀卜と結びつけられないか。卜骨はユーラシア大陸の中央から北に広まっており、本来、鹿や牛の肩胛骨が使われることが多かった。中国ではそれが亀の腹甲へと変えられる。遊牧系の民族の信仰は天であり、天神・上帝が彼らの神であったと思われる。天神・上帝と太陽は無関係ではないだろう。

卜骨は骨を火で灼き、できた骨の罅割れの形を見て神の意志を占う。当初は骨付き肉を供物として焼いた時にできる罅割れを見たのだろうが、のち、一つの骨を複数回使用するために点状有灼法が発明された。これは骨の一部を薄く削り（マチを切るという）、火のついた枝を押し当てて行う。日本では桜の木が使われた。この時に使用する「火」は、どのような火だったのだろう。

『淮南子』覽冥訓には「乞火不若取燧（火を乞うは燧に取るに若かず）」と、火を取る最も有効な方法として、「陽燧」の使用が説かれる。実際、凹面鏡を太陽に向け、焦点に黒い紙を置くと瞬く間に燃え上がる。

同天文訓では、

夫陽燧取火於日、方諸取露於月（夫の陽燧は火を日に取り、方諸は露を月に取る）

とその火を太陽から取るという。

後漢、王充の『論衡』亂龍篇には、

日火也、…鑄陽燧、取飛火於日（日は火なり、…陽燧を鑄て、飛火を日より取る）

と記される。ここでは「日火也」と「日」と「火」は同じである。「陽燧取火於天（陽燧は火を天より取る）」も同様の表現である。

詰術篇には、

日火也、在天爲日、在地爲火、何以驗之、陽燧鄉日、火從天來、由此言之、火日氣也。（日は火なり、天に在りては日と爲り、地に在りては火と爲る、何を以て之れを驗せん、陽燧日に鄉わば、火は天從り來たる、此に由りて之れを言えば、火は日の氣なり）

と記されている。ここでは、「火日氣也」と「火」は「日」の気であるという。

定賢篇には、

日者陽之主也、（中略）故陽燧見日則燃而爲火方諸見

月則津而爲水。（日は陽の主なり、（中略）故に陽燧、日を見れば則ち燃えて火と爲る。方諸、月を見れば則ち津ありて水と爲る）

とみえる。

その注釈に、

陽燧金也、取金杯無縁者熱摩令熱、日中時以當日下以艾承之、則燃得火。（陽燧は金なり、金杯の縁無き者を取りて熱摩して熱からしめ、日中せし時、以て日の下に當て、艾を以て之れを承くれば、則ち燃えて火を得）

とみえ、陽燧の焦点に「艾」をおいて発火させるとわかる。

点状有灼法は燃えた木の先を押し当てると述べた。けれども木の枝が手に入らない草原ではどのようにしたのだろう。本来、陽燧で光を集め火を取った。だとすれば、光の焦点を直接、骨に当てる方がはるかに簡単である。そしてその焦げた痕跡は「点」として残る。点状有灼法はここから始まったのではないか。

太陽（天帝）→光（天帝の意志）→陽燧（凹面鏡）→光の焦点→火→骨に亀裂（天帝の意志の顕在化）

となる。枝に火をつけて灼くことは上記の手順の簡便化ではないか。何れにしても火と太陽（天、天帝）の意志を視覚的に認識できる。

多鈕細文鏡

多鈕細文鏡は陽燧である。鏡とされるが鑑であろう。磨けば顔は映るが、ややいびつになり、本来の用途は太陽から火を取ることだろう。北方の出土例が多いが、日本にもある。背面には三角形と細い線が描かれることが多い（図1-10(注18)）。エジプトに太陽光線を直線であらわす例がある。ここも太陽の光線を視覚化したものではないか。日本出土の鏡の背面には同心円の小円があわせて八つ描かれている。これも太陽ではないか。それはまた鏡の連珠文や乳につながるものではないだろうか。

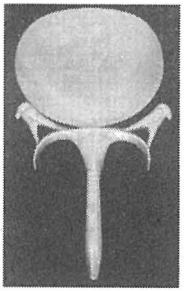
三、十日説話(注19)

中国古代の太陽

曽布川寛氏は「中国古代の太陽表現―馬王堆と三星堆(注20)」において三星堆（前一一〇〇年頃）と馬王堆の太陽を比較考察している。馬王堆帛画には大きな太陽と扶桑の枝にある小さな八つの太陽が描かれているが、それを弓の名人の羿が九つの太陽を射落としたとされる十日神話と結びつけて考察している。その話の淵源を四川省三星堆から出土した樹木と鳥、太陽などに求めようとする

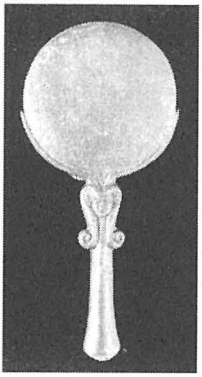
図版1-3 背中作日形光芒四射圃以八角花漢日光鑑『徐乃昌蔵中国古鏡拓影』→注3

図版1-2 斉家文化の鏡（中国最古）『中国銅鏡図典』→注3

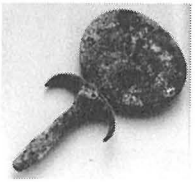


図版1-1 エジプトの鏡 隼は太陽神であり、太陽の復活再生観念と関連する。鏡がやや扁平なのは日の出の太陽をあらわすという。『大英博物館古代エジプト展』→注1

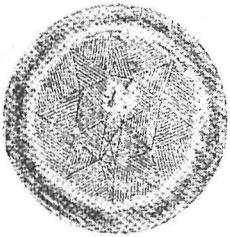
図版1-6 アンク Ankh 生命を意味するが、鏡の象形という説もある。『エジプトの秘寶』→注12



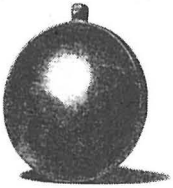
図版1-5 エジプトの鏡 Mirror with Hathor head 鏡部分は真円形『大英博物館古代エジプト展』→注13



図版1-4 エジプトの柄付き鏡 ロータスをあらわす。新王国時代『古代エジプト文明3000年の世界』→注10



図版1-10 北朝鮮出土の多鈕鏡 三角形と細線は太陽の光芒ではないか。『古鏡』→注18



図版1-9 陽燧 太陽光を集めて点火する。太陽（天帝）→光(天帝の意思)→陽燧（凹面鏡）→光の焦点(火・点状有灼法)→骨の上の裂縫（天帝の意志） 『北方騎馬民族の黄金マスク展 』→注17

図版1-7 鑑 水を入れて鏡にする。『商周銅器』→注14

図版1-8

鑑の甲骨文→注15

ものである。

劉安（前一七九～一二二）編『淮南子』墜形訓に天地の中心の花の話がみえる。

昆侖之丘、或上倍之、是謂涼風之山、登之而不死。或上倍之、是謂懸圃、登之乃靈、能使風雨。或上倍之、乃維上天、登之乃神、是謂太帝之居。扶木在陽州、日之所曜。建木在都廣、衆帝所自上下、日中無景、呼而無響、蓋天地之中也。若木在建木西、末有十日、其華照下地。（昆侖之丘、或いは上りて之れに倍すれば、是れを涼風の山と謂う、之れに登れば而ち死せず。或いは上りて之れに倍すれば、是れを懸圃と謂う、之れに登れば乃ち靈なり、能く風雨を使う。或いは上りて之れに倍すれば、乃ち上天に維ぎ、之れに登れば乃ち神なり、是れを太帝の居と謂う。扶木陽州に在り、日の曜やく所。建木は都廣（高誘云、南方山名）に在り、衆帝の自りて上下する所、日中景無し、呼びて響き無し、蓋し天地の中なり。若木は建木の西に在り、末に十日有り、其の華、下地を照らす）

ここでは建木と若木の二種類の木が記されている。「若木在建木西、末有十日、其華照下地」と若木の末、つまり梢に十日、即ち十個の太陽が有り、その華が地上を照らしている。太陽は若木の梢から生まれるという。それは花が咲くかのようであり、実際、「華」と記されている。この記述を三星堆の青銅製の樹木（図2-3(注21)）と比べてみよう。梢には青銅製の花が咲き、花の顎に近い部分には円形の輪があり、それは日輪の象徴とされている。また花の上には鳥がいる。鳥の種類はいくつもあるが、エジプトのバーに似た人面鳥もいる。他に直径八四・五cmもある巨大な太陽輪（図2-4(注22)）も出土している。三星堆と『淮南子』とは千年もの隔たりがあるが、その内容の一致には驚かされる。

曽布川氏も指摘するように、三星堆の遺物と馬王堆帛画には多くの共通点がある。馬王堆帛画の左側（向かって右）には扶桑が描かれる。樹木というよりは蔓草状である。これは箆鹿の角の形に基づくのだろう。鹿は落ちた角が生え替わり、成長していく。それが不死と再生の象徴とされたのだろう(注23)。その扶桑樹に赤い太陽が八つ描かれ、中央の大きな太陽と合わせて九つとされる。

『淮南子』本經訓には以下のようにみえる。

逮至堯之時十日並出、焦禾稼、殺草木、而民無所食。猰貐、鑿齒、九嬰、大風、封豨、脩蛇皆爲民害。堯乃使羿誅鑿齒於疇華之野、殺九嬰於凶水之上、繳大風於青丘之澤、上射十日而下殺猰貐、斷脩蛇於洞庭、

禽封豨於桑林。萬民皆喜、置堯以爲天子。（堯の時に至り十日並び出づるに逮び、禾稼を焦がし、草木を殺ぎて、民食らう所無し。猰貐、鑿齒、九嬰、大風、封豨、脩蛇皆な民の害を爲す。堯乃ち羿をして鑿齒を疇華の野に誅し、九嬰を凶水の上に殺し、大風を青丘の澤に繳し、上は十日を射て下は猰貐を殺し、脩蛇を洞庭に斷ち、封豨を桑林に禽にす。萬民皆な喜び、堯を置きて以て天子と爲す）

この記述は、十日つまり十個の太陽が一度に出たため、「焦禾稼、殺草木」となり、「民無所食」となった。そのため、羿が「十日を射」たという話である。ここで活躍したのは羿だが、民が喜んで天子としたのは堯とされている。

弓矢で射るのはそれを手に入れるため、或いはその属性や能力を獲得するためではないか。前漢初期、馬王堆出土の『胎産書』には、男の子を生むために「（射）雄雉」という記述がある。それによって雄＝男という属性が獲得されると考えたのだろう。

羿が太陽を射落としたのも、太陽の持つ再生と不死の能力を手に入れるためであったのではないか。羿と不死の話は『淮南子』覽冥訓で以下のようにみえる。

譬若羿請不死之藥於西王母、姮娥竊以奔月、悵然有喪、無以續之。何則不知不死之藥所由生也。（譬えば羿、不死の藥を西王母に請い、姮娥、竊みて以て月に奔り、悵然として喪う有り、以て之れを續ぐ無きが若し。何となれば則ち、不死の藥の由りて生ずる所を知らざればなり）

太陽を射落とす話は無く、羿が西王母に不死の藥を請うたものの、姮娥が竊んで月に奔ったという話になっている。不死の藥＝太陽の復活再生能力だろうが、羿はそれを手に入れられずに、かわりに月（姮娥）がそれを手に入れた話のようにみえる。

十日

御手洗勝（注24）は、この説話は日蝕で太陽が死にそうになることを助けるために火矢を放った儀礼から始まるとし、太陽が熱いから、撃ち落としたとするのは後世の変化したものとする。また甲乙丙丁…は十日の名前、つまり十の太陽のそれぞれの名であるとする。大林太良（注25）は「太陽を射る話と朝日長者」の中で、岡正雄の論文「太陽を射る話」を引き、複数の太陽があったという話や、一二の太陽があったという話を紹介する。いずれにしても復活再生儀礼としている。馬王堆帛画の扶桑は、このような太陽の話にエジプト的な復活再生観念が重なりあったものであろう。太陽信仰はエジプトに顕著に見られ

るが、太陽は地下を潜行し、再生して復活する。中国の場合も湯谷の話の中に、そのあたりの事が詳しく記されていく。

四、漢以前の鏡と太陽

古代の鏡は四角いものもあるが、殆どが真円形で、それは太陽の形なのだろう。顔の形に合わせれば楕円形になるはずである。

斉家文化の青銅鏡

中国最古の斉家文化の鏡は真円形で背面には「七角星形図案(注26)」、「星形文(注27)」があると「星」とされているが、太陽の形象ではないか。薛家岡文化（前三八〇〇頃～前一四〇〇頃）の鳥形玉飾（図2-5(注28)）は胸に八角の文様があるが、これは太陽とされる。〇が太陽で八角はその光芒であろう。オリエントの太陽の図（図2-6,7(注29)）はこれと似る。金星と紛らわしいが〇で囲まれている。複数の太陽の例もみえる（図2-8(注30)）。太陽が星形で光芒のある文様は先にみた北朝鮮出土の多鈕鏡も同様である。

商・周・春秋・戦国の青銅鏡

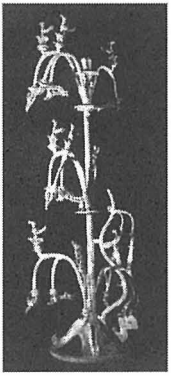
商・周には背面に不規則な斜線の多数入った鏡がある。線で太陽光を表わすことはエジプト・オリエントにあるが、全く同じではない。そもそも商・周時代の鏡の出土例は甚だ少ない。周に二頭の虎が左右対称に描かれ、上部に鳥のいるものがある。これは動物文の系列に位置付けられるかも知れない。春秋晩期の素鏡に鏡面が平面のものがあるが多くはない。大半が凸面鏡である。これは直径一〇cm程度でも顔全体を映しだすことができる。鏡は戦国時代から多くなり、西方の技術である金銀象嵌を施したものもある。

五、鏡銘と太陽

「見日之光」の四文字で完結している鏡の銘文がある。この場合は「日の光を見わす」と読んで、鏡が太陽そのものであることを表しているようだ。「見日之光、天下大陽」「見日之光、天下大明」「見日之光、長毋相忘」の場合は、「日の光を見れば、天下大いに陽らか」などと、仮定法のように読むようである。この場合も鏡が太陽であることを表しているようだが、銘文が再生観念と結びつくわけではない。けれども前漢から後漢にかけての博局鏡に「上有仙人不知老(注31)(上に仙人有り老いを知らず)」のような銘文が現われ、仙人との関係が説かれる。また、

鳥、花と太陽円盤

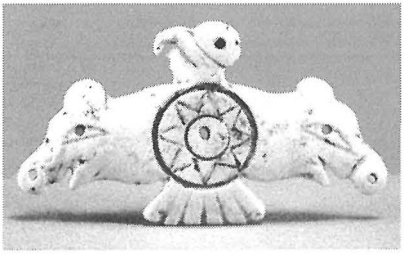
下を照らす花と太陽円盤



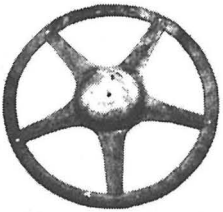
図版2-3 三星堆の神樹『神話祭祀与長江文明』→注21

図版2-2 大きな太陽と八つの小さな太陽。同右

図版2-1 馬王堆漢墓帛畫 右上に扶桑と、それより生み出される太陽がみえる。『長沙馬王堆一號漢墓』→注6



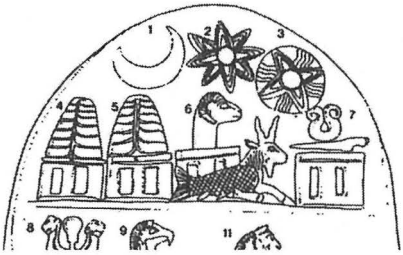
図版2-5 薛家岡文化の鳥形玉飾　胸の前に太陽図案『世界美術大全集　東洋編　先史・商・周』→注28



図版2-4 三星堆の太陽輪 直径84.5cm『三星堆研究』第一輯　→注22

図版2-7 Akkad王朝時代の円筒印章 太陽 同右

図版2-8 Akkad王朝のNaram sin（在位公元前2254～2218）の戦勝紀念碑　複数の太陽が描かれる。同右→注30



図版2-6 メソポタミアの太陽 Kassites王朝時代（公元前12世紀）の境界石　1月・2金星・3太陽星には円盤がない 太陽には円盤がある 太陽の波線は光芒　『太陽神の研究・メソポタミアの太陽神とその図像』→注29

「白虎引直上天(注32)(白虎引きて直ちに天に上る)」は虎に率いられて昇天することを示唆する。「服者萬年(注33)(服する者萬年)」や「位至三公(注34)(位三公に至る)」といった生者を対象とした銘文も多い。「上大山、見神人、食玉英、飲澧金(泉)、宜官秩、葆子孫、長樂未央、富貴昌、予(與)毋極、駕非(飛)龍、由(游)浮雲(注35)(大山に上り、神人を見、玉英を食らい、澧金(泉)を飲み、官秩に宜しく、子孫を葆ち、長く樂しみて未だ央きず、富貴昌ん、予(與)極まり毋く、非(飛)龍に駕し、浮雲に由(游)ぶ)」の「宜官秩」や「富貴昌」は官職、秩禄、富貴に関連し、現実世界の話である。しかし、「駕非(飛)龍、由(游)浮雲」の部分は仙人となって龍や浮雲に乗ることをいう。このような銘文を持つ鏡は生者が使用するだけではなく、副葬用でもあったのだろう。死者が昇仙し、仙人の世界で暮らすことを願ったともみなせる。

見日之光

上海博物館所蔵の透光鏡は2つある。その1つに「見日之光、天下大明」と記される。ここでは同様の銘を持つ鏡を図表(付表参照)とした。

『徐乃昌蔵中国古鏡拓影(注36)』は出土地が不明で資料としての制約がある。けれども多数の鏡が収録され、図像や銘文の変遷を調べるにはある程度有用である。徐乃昌は一一八番において、「背中作日形、光芒四射、圍以八角花(背中に日形を作す、光芒四射、圍むに八角の花を以てす)(図1-3)」と述べる。「日形」は太陽の形で、連弧文で囲まれた形を太陽の光輝く様子と捉えたのであろう。同時に八角形の花で囲まれるようにもみえるという。両様の形にみえるところが興味深い。一一九の鏡にも同様のコメントがある。背面の太陽と銘文の「見日之光」は関連する。

「見日之光」の銘文を持つ鏡は多いが、形式は「草葉鏡」・「四乳銘文鏡」などに限られる。草葉鏡の草葉はパルメット文様の変形と見ることができる。パルメットはエジプト起源の文様であり、睡蓮に基づく。睡蓮は太陽と関連があり、連弧文も小さな太陽が連続している様子と捉えることができる。

透光鏡

上海博物館蔵品の見日之光透光鏡(図3-1(注37))と内清質以昭明透光鏡(図3-2(注38))は、鏡面に反射した光が鏡背の文字と文様を映し出す(図3-5,6辻尾榮市氏撮影)。その理由は以下のように述べられる。

この透光鏡は前漢中晩期のもの。背面に銘文と同心円および連弧文がある。表の鏡面に日光または灯光をうけると、裏の文飾と同じ投影図象を反射する。

付表 1 『徐乃昌蔵中国古鏡拓影』

鏡名	銘文	日本の名称（注1）	連弧紋	乳	直徑	時代	地域	備考
漢日光鑑	見日之光、天下大陽	方格葉文鏡	16	4	六寸一分（14.4cm）	漢		『徐乃昌蔵中国古鏡拓影』第2分冊、木耳社、1984 107
漢日光鑑	見日之光、天下大陽	方格葉文鏡	16	4	四寸九分（11.6cm）	漢		同 108
見日鑑	見日之光、天下大明	方格葉文鏡	16	4	五寸（11.8cm）	漢		同 109
漢日光鑑	見日之光、天下大明	方格葉文鏡	16	4	四寸九分（11.6cm）	漢		同 110
漢日光鑑	見日之光、天下大明	方格葉文鏡	16	4	四寸八分（11.4cm）	漢		同 111
漢日光鑑	見日之光、天下大明	方格葉文鏡	16	4	四寸九分半（11.7cm）	漢		同 112
見日鑑	見日之光、長毋相忘	方格規矩葉文鏡	16	4	四寸九分（10.7cm）	漢		同 113
日光鑑	見日之光、長毋相忘	方格葉文鏡	16	4	四寸八分（11.4cm）	漢		同 114
漢長毋相忘鑑	見日之明、長毋相忘	方格葉文鏡	16	4	四寸九分（11.6cm）	漢		同 115
見日鑑	見日之光、長毋相忘	方格葉文鏡	16	4	五寸三分（12.6cm）	漢		同 116
日光鑑	見日之光、長毋相忘	精白式内行花文鏡	16	乳については記さない。連珠が12	七寸一分（16.8cm）	漢		同 117 徐は「背中作日形、光芒四射、圍以八角花」と述べ、この形が太陽で光芒が四射している様子だ

日光鑑	見日之光、長毋相忘（外側の銘文、涑治銅清而明、以之爲宜文章、延年益壽辟不祥、與天無極如日之光、長秋萬歳長樂）	精白式内行花文鏡	8（内区）	乳については記さない。連珠が12	七寸一分（16.8cm）	漢			同 118 徐は同様に「背中作日形、光芒四射、外圏八角花」と述べる。	という。ただし、内区にある連弧文については、八角の花と捉えている。
漢日光鑑	見日之光、長毋相忘（外側の銘文、内清□以昭明、光□象夫日月、心忽稘而□忠、然雖塞而不泄）	重圏日光鏡	16	12（※徐は乳と解すが連珠文だろう）	四寸八分（11.4cm）	漢			同 119	
漢日光鑑	内見日之光、長毋相忘（外側の銘文、内清□以召（昭）明、光□象夫日月、心忽□而忠□、塞而不泄）	重圏日光鏡		12（※徐は乳と解す）	五寸四分（12.8cm）	漢			同 121	
漢日光鑑	見日之光、天下大陽（外側の銘文、内清□以召（昭）明、光□象夫日月、心忽□而忠□、□塞不泄）	重圏日光鏡			四寸（9.5cm）	漢			同 122	
漢日光鑑	天日之□、天下大陽（外側の銘文、内清□以召（昭）明、光□象夫日月、心忽□而忠□、□塞不泄）	日光鏡			三寸一分（7.3cm）	漢			同 123	
見日鑑	外側の銘文、見日月之□□毋□	内行花文鏡			三寸（7.1cm）				同 124	
漢日光鑑	見日之光長不□忘	内行花文鏡			二寸八分（6.6cm）				同 125	
漢日光鑑	見日之光長不相忘	内行花文鏡			二寸九分（6.9cm）				同 126	
漢日光鑑	見日之光天下大明	内行花文鏡			二寸四分（5.7cm）				同 127	
漢日光鑑	見日之光天下大□	内行花文鏡			二寸三分（5.4cm）				同 128	

（1）原文には無いが、日本の注訳者がつけたもの。

付表 2　孔祥星『中国銅鏡図典』

鏡名	銘文	名称	連弧紋	乳	直径	時代	地域	備考
日光單列單層草葉鏡（1）	見日之光、天下大陽		16		11.6cm	漢武帝元光元年（公元前135年）以後（因為此墓還出土了《漢武帝元光元年曆譜》）	山東臨沂銀雀山二号墓出土	孔祥星『中国銅鏡図典』、文物出版社、1992 内向16連弧紋縁 199頁 ※『徐乃昌蔵中国古鏡拓影』との重複は考慮せず。
日光單列單層草葉鏡（2）	見日之光、〔天下〕大明、服者君卿	草葉鏡			13.5cm		河南洛陽出土	伏螭鈕 199頁 図無し
日光單列連疊草葉鏡（1）	見日之光、美人在旁	草葉鏡						内向16連弧紋縁 201頁
日光單列連疊草葉鏡（2）	見日之光、天下大陽	草葉鏡			14.4cm			内向16連弧紋縁 203頁
日光博局対稱連疊草葉鏡	見日之光、長毋相忘	草葉鏡			13cm	西漢中葉	陝西長安西漢中葉墓出土	内向16連弧紋縁 204頁
日光博局蟠螭連疊草葉鏡	見日之光、長毋相忘	草葉鏡			13.6cm	漢		内向16連弧紋縁 205頁
見日之光四乳銘文鏡	見日之光、天下大明	四乳銘文鏡			7.7cm	漢	陝西淳化出土	217頁
日光四乳銘文鏡	見日之光	四乳銘文鏡				漢		218頁
無し	見日之光、君忝何傷	四乳銘文鏡			8.4cm	漢	陝西西安出土	220頁 図像無し

現存の古文献には、隋代以来古代透光鏡に関する観察と鋳造法の推論がある。この種の「透光」現象は、鏡面に鏡背の文様と対応する、肉眼では見えない微観曲率ができることによって、光線がその微観曲率を反射中に敏感に現わすというもの。研究によれば、鏡面に微観曲率ができるのは、鋳造過程で厚い所と薄い所の冷却速度の違いが、内応力の違いを生み出すためで、冷却後さらに適当な物理的処理を加えれば、この不思議な反応を現わす。

同形の鏡は多いが、同様の効果が得られるのではないか。透光鏡の存在により、鏡が日光を反射させていたことがわかる。それは鏡自身が太陽をあらわしていることと関連するであろう。おそらく、儀式においても効果的に使用されていたのだろう。

六、文様と太陽

文様は何かを象徴することが多く、しばしば辟邪や吉祥の役割をもつ。文様は変化し、複合化していくが、ここでは鏡の文様の中から太陽と関連するものを指摘したい。

連弧文

太陽は一つではなく複数あるという考え方は世界各地にある。エジプトでは太陽は日没という「死」のあと地下をめぐり、日の出として「再生」すると考えられた。中国でも湯谷で水中に没した太陽が扶桑の枝をのぼり「再生」する十日神話となる。前漢の馬王堆帛画には大きな太陽と扶桑の枝の間にある八つの小さな太陽が画かれている。これを鏡背と比較してみよう。鈕の部分が大きな太陽、周りの連弧や連珠を生まれ出る前の小さな太陽たちとは見なせないだろうか。円弧は完全な円ではない。それを円(太陽)の一部が地下に隠れた形と見て、生まれ出ようとする太陽の象徴とは見なせないか。

戦国時代の雲雷紋地連弧紋鏡（図3-3(注39)）では鏡の辺縁に七つの円弧と、その内部に一つずつ小円が描かれている。漢代の日光連弧銘帯鏡（図3-4(注40)）では連弧（八つ）が内側に入りこみ、「見日之光、天下大明」という銘文がつけられる。日光單列連畳草葉鏡(図3-7(注41))では、「見日之光、大陽」という銘文がある。「大陽」は「大いに陽(あき)らか」という意味だが、「日の光」を陰陽思想で解釈し、「大陽」と表わすことにも繋がり、「太陽」に通ずる語であろう。日光四花瓣四花葉鏡（図3-8(注42)）は破砕された鏡であるが、「見（下残）大陽、服者君卿、所言□□」で、やはり「大陽」という銘文を持つ。この鏡は連弧が

一六であり、その中に四葉紋の乳と周囲に八個の連珠がある模様があわせて四つある。

連珠紋

漢の昭明連弧銘帯鏡（図3-9(注43)）では鈕の周りに一二個の円が連続する連珠文を描く。これは先の小円が円弧から離れて描かれたのだろう。

乳

漢の合好七乳禽獣鏡（図3-10(注44)）では七乳が描かれる。乳は乳首に似た突起という意味だが、連珠文が、ばらけて小さくなり、盛りあがったともみなせる。ここでは辺縁に太陽(烏)と（図4-1）と月(蟾蜍)（図4-5）が描かれる。陳氏六乳禽獣鏡（図3-11(注45)）も同様に太陽（烏）（図4-4）と月（蟾蜍）（図4-5）がある。善銅七乳神獣鏡（図4-11(注46)）を見れば、乳（図4-12）と連珠文（図4-13）とが、本来、連弧紋の鏡（太陽）であったことがよくわかる。

烏とハヤブサ

太陽中の烏の図はいまのところ馬王堆三号墓のものが最も古く一号墓のものがそれに継ぐ。ここでは太陽の中に蹲る黒い烏が描かれる。エジプトによく似た図（図4-3(注47)）があり、そこでは、魂をあらわす人面鳥のバーであり、ハヤブサの姿をしている。先に見たように、ハヤブサは太陽神であり、夜明けに再生するという考えと結びついている。

蟾蜍とスカラベ

月中の蟾蜍の図（図4-6）もやはり馬王堆の二種（図4-9）が最も古い。これもエジプトによく似た図（図4-8(注48)）があり、そこでは太陽の中にいるスカラベである。スカラベも太陽の復活と関連する聖なる虫である。蟾蜍の図は草葉鏡の鈕（図4-7(注49)）のような形で展開していく。画像石にも月中の蟾蜍を掲げた図（図4-10(注50)）があるが、それもスカラベに似ている。

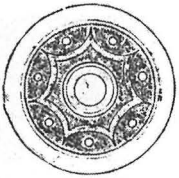
芝草

エジプトの睡蓮に基づく文様でパルメット文（図4-16）と呼ばれる。睡蓮の花は夜は水の中に潜り、昼は再び水から顔を出す。そのため、「死と再生」をあらわすとされ、この文様は全世界に広まり、中央アジアにもある（図4-17(注51)）。中国では蓮と習合して、仙人の持つ不死の仙薬、芝草（図4-18(注52)）とされた。簡化博局鏡（図4-19(注53)）では畳雲文とされるが、八つ描かれている。王氏四神博局鏡（図5-1(注54)）では羽人が手に持っている。

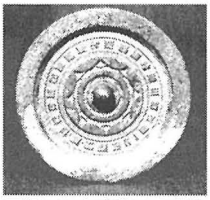
四葉文の鈕

鏡の中央の鈕の周囲は四葉文（図5-3）で飾られることが多い。この文様は「葉」と名づけられるが、じつは「花」

図版3-4 漢 日光連弧銘帯鏡 銘文 見日之光天下大明 同右→注40



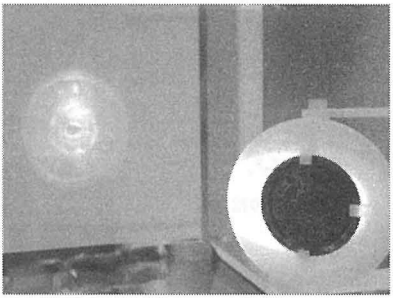
図版3-3 戦国 雲雷紋地連弧紋鏡 連弧文、連珠『中国銅鏡図典』→注39



図版3-2 内清質以昭明鏡『中華人民共和国古代青銅器展』→注38

図版3-1 見日之光透光鏡 銘文 見日之光天下大明 上海博物館 撮影 2008.10.21 辻尾榮市氏 →注37

図版3-6 透光鏡の原理 同右



図版3-5 透光鏡の背面が映し出される様子 上海博物館 撮影 2008.10.21 辻尾榮市氏

図版3-9 漢 昭明連弧銘帯鏡 連弧文、連珠 同右→注43

図版3-8 日光四花瓣四花葉鏡 銘文 見（下残）大陽服者君卿所言口口 同右→注42

図版3-7 日光單列單層草葉鏡 銘文 見日之光天下大陽『中国銅鏡図典』→注41

図版3-11 陳氏六乳禽獸鏡 辺縁に太陽（三足烏）と月（蟾蜍） 同右→注45

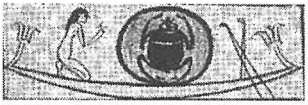
図版3-10 合好七乳禽獸鏡 辺縁に太陽（三足烏）と月（蟾蜍） 内区に四葉文『中国銅鏡図典』→注44

図版4-4 太陽中の烏
→図版3-11 注45

図版4-3 エジプトの太陽と隼
（バー、オシリス）→注47

図版4-2 太陽中の
烏 馬王堆帛画
→図版2-2 注6

図版4-1 太陽中の
烏→図版3-10 注44



図版4-8 エジプトのスカラベ(太陽の
中)→注65

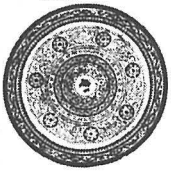
図版4-7 月中の蟾蜍
→注64

図版4-6 月中の蟾蜍
→図版3-11 注45

図版4-5 月中の蟾蜍
→図版3-10 注44

図版4-12 乳の拡大図
同右→注46

図版4-13 連珠文の
拡大図 同右→注46



図版4-11 善銅七乳神獣鏡
連珠と乳は内行花文鏡
（連弧文鏡）に似ている
『中国銅鏡図典』→注46

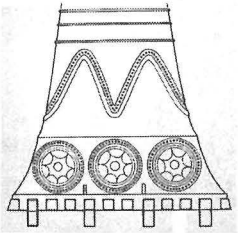
図版4-10 画像
石の蟾蜍と月
『四川漢畫像
磚』→注50

図版4-9 馬王堆の蟾蜍
と月→図版3-10 注44

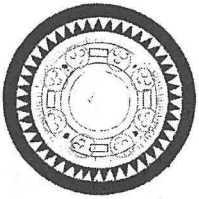
図版4-14 内行花文鏡
（連弧文鏡）日本京
都出土『古鏡』→注79

図版4-18 芝草をもつ
仙人（羽人）芝草の
図はエジプトのPalmet
文に似ている→注52

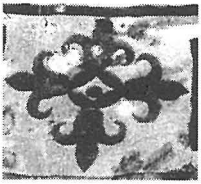
図版4-16 エジプト
のPalmet文『美術
様式論』



図版4-15 太陽型器
「太陽芒紋」と似る。
内行花文鏡に酷似す
る。『三星堆祭祀坑』
→注78



図版4-19 Palmet文 簡化博局鏡
『中国銅鏡図典』→注53



図版4-17 パジリクの
Palmet文『世界美術
大全集』→注51

だとされている。駒井和愛は以下のように述べる。

細川護立氏所蔵の漢金畫飾盤の内面中央のそれの如く、大きい品葉の間に、小さい四葉が表はされ、八葉になつてゐるものが存することからも察せられる。更に注意すべきことは壽縣出土鏡（図5-4(注55)）のあるものの如く、中央の方鈕の周圍に八個の葉状装飾を施し、また内区に山字文と四葉文とを配し、しかもその四葉文とを配し、しかもその四葉文のうちには長い茎が附いてゐて、之が恰も水面に咲き出てゐる花を表はしたものではなからうかと思はせるもののある事實であらう。しかもまた漢代の中国人が、かかる四葉文を以つて、華文と稱してゐた事が文獻の上からも傍證されるのは興味あるところである(注56)。

「四葉文のうちには長い茎が附いてゐて、之が恰も水面に咲き出てゐる花を表はしたもの」という表現は、蓮或いは睡蓮の花のようなイメージを与える。なお「華文」は『史記』禮樂志にみえるが、そこでは「あや」「はなやかな文章」と解釈されている。同じく駒井の「中國河南省洛陽金村發見の華蚤（図5-5(注57)）」は四葉文が立体化したものである。

漢、蔡邕撰『獨斷』巻下に、「輿車皆羽蓋金華爪」とみえる。この「華爪」は『後漢書』輿服志、輿服上には「華蚤」とみえる。薛綜(注58)は「金作華形、莖皆低曲（金もて華の形を作り、莖皆な低く曲がる）」と注釈をつける。「金華爪」は、金で茎のある花の形を作ったのだろう。金色は太陽の色にみえる。

駒井は「少くとも四葉文の或るものが芙蓉(注59)」と、「芙蓉」すなわち「蓮」とみなしている。ただし、建物の装飾に使用する意味は、『宋書』禮志「殿屋之爲員淵方井兼植荷華者、以厭火祥也（殿屋の員淵、方井を爲り、兼ねて荷華を植うるは、以て火祥を厭すればなり）」を引き、「水物であるから(注60)」と厭勝の火災除けとする。建物や瓦に関しては、その意味を持つと思われるが、鏡の場合については、むしろ太陽と結びつけて考えたい。

鋸歯文

商や周の青銅器の壺の上部に蓮または睡蓮の花が開くものがある。その花びらの文様が壺の周りに描かれた。花びらがしだいに小さくなり数が多くなって鋸の歯のようにみえたため、鋸歯文(図5-2)と呼ばれるのではないか。本来、睡蓮の花びらに基づくとすればパルメット文と同の意味を持つ。

博局文

博局鏡は方格規矩四神神獣文鏡とも呼ばれる。規矩は

規（compass）と矩（定規）だが、じつは伏羲・女媧が手に持つ規矩とは形が異なる。文様がＴＬＶに似るため、ＴＬＶ字鏡とも呼ばれる。これらは外見からの命名で伏羲・女媧とは無関係であろう。

博局鏡という名称は双六の類である六博の盤に似るからである。六本の箸（賽子の役割）を投げ、白と黒６個ずつの棊（駒）を動かす遊戯である。孔子（前五五一～四七九）は、「飽食終日、無所用心、難矣哉。不有博弈者乎、爲之猶賢乎已（飽食すること終日、心を用うる所無きは、難きかな。博弈なる者有らずや、之れを爲すは猶お已むに賢れり）（『論語』陽貨篇）」と、飯を腹一杯食うだけで何も考えないよりは、博奕をしている方が（頭を使うだけ）、まだましだ、と述べているが、博弈は六博のことかもしれない。戦国時代の中山王国から博盤（図5-6（注61））が出土している。盤は方形で蛇・龍・虎・鳳が描かれる。博局鏡は方形の盤を円に押し込め、ＴＬＶが丸くなるが、鈕の周囲は方形が残った。孔祥星・劉一曼は、「今、銅鏡にみられる規矩文を六博局文と呼ぶことも可能である。しかし、日用品の銅鏡の背面に、どうして遊び道具の六博の構図を用いたのであろうか？　これについての適当な解釈はない（注62）」と六博局文が鏡の文様として用いられる意味については未解決としている。

賽の目は神意を示すもので盤上遊戯は本来、宗教的な占いと関わるようだ。エジプトの遊戯盤には側面に『死者の書』に似た語が刻まれ、冥界に旅立った死者が迷わず進めるようにと記されたものがある。『死者の書』はエジプトの宗教観を示す書で、地中に降りた死者が審判を受けて、太陽と共に再生復活することが書かれている。「遊戯盤との関連をみると、（一）死者を駒で表し、（二）桝目は死者の遍歴する路か、（三）あるいは太陽の舟の進む路、を示している（注63）」とされる。つまり、盤上遊戯は死者が太陽とともに無事にあの世に到達できるかどうかを、賽子などで神意を伺いながら占う神事ということになる。

中国の博盤と類似のものはエジプトにはない。盤の形はむしろインドの古い盤上遊戯であるパーチージ（Parcheesi）に似ている。これは印度双六とよばれ、上がりを競う盤上遊戯である。博盤に蛇が描かれているところは、同じくインドの盤上遊戯「蛇と梯子（snakes and ladders）」を想起させる。博盤がもしエジプトの盤上遊戯と同様の意味を持つならば、博盤やそれを象った博局文の鏡が副葬される意味が理解できるのではないか。これは死者があの世に到達できるかどうかを神に占う道具であったのかもしれない。

鈕と聖甲蟲

「母忘博局對稱連疊草葉鏡」の鈕は動物の形（図4-7(注64)）である。「伏蝶鈕」とされ、四足の動物にみえるが、蟾蜍にも見え、それはまたエジプトのスカラベ（scarab）のように見える。エジプトのスカラベは太陽を昇らせる虫であり、太陽の中に描かれている（図4-8(注65)）ことが多い。

西王母

西王母は仙界の領袖である女仙。仙界は死者の世界でもある。前漢末の哀帝の時に西王母を祀ると不死となるという信仰がおこり、その後、鏡の文様に登場した。新の王莽の時の禽獸博局鏡（図5-9(注66)）に初期の西王母（図5-10）がみえる。東王父はまだ登場していない。エジプトの魔除けの神で冥界に住むベス（Beth）がその前身であるという説もある(注67)。ベスは死者が冥界で通り抜けねばならない関門にいる神で、閻魔大王によく似た働きをしている。西王母が博盤の中に描かれているのも、本来、ベスと同様に、死者がそこを通過しなければならないという役割を担わされていたのかも知れない。元興元年（一〇五）環状乳神獸鏡では東王父と一対で描かれ、銘文にも「寿如東王父西王母（寿は東王父、西王母の如し）」と、長生きの象徴とされている。

唐代以降の鏡

八出葵花形（八花鏡）（図5-8(注68)）は正円ではない。円から八つの円弧が外に飛び出し、連弧紋が外に向いた形である。先が花弁のように突出したものを八瓣菱花形（八稜鏡）という。瑞獸葡萄鏡（海獸葡萄鏡）は円形が多く、瑞獸と葡萄の模様が描かれている。宋代になって柄鏡が現れる。けれども、主流となるわけではない。

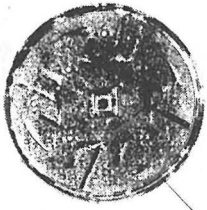
七、日本の鏡

日本の神話の鏡

日本の鏡も太陽と関連がある。『日本書紀』巻第一、神代上では、

伊弉諾尊曰、吾欲生御宙之珍子、乃以左手持白銅鏡、則有化出之神、是謂大日靈尊。右手持白銅鏡、則有化出之神、是謂月弓尊。（伊弉諾の尊曰く、吾れ御宙の珍子を生まんと欲す。乃ち左手を以て白銅鏡を持てば、則ち化出の神有り。是れを大日靈尊と謂う。右手に白銅鏡を持てば、則ち化出の神有り。是れを月弓の尊と謂う）

とされる。ここでは、伊弉諾尊（男神）が左手に白銅鏡を持って作り出したのが、大日靈尊という。日神つまり太

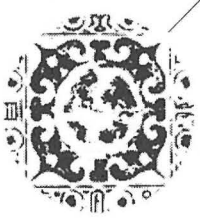


図版5-4 壽縣出土鏡
『中国古鏡の研究』
→注55

図版5-2 鋸歯文 同右
→注52

図版5-1 王氏四神博
局鏡『中国銅鏡図典』
→注54

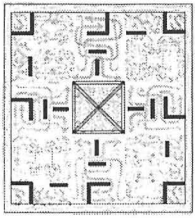
図版5-5 四葉文は葉で
はなく花 同上→注55



図版5-3 四葉文 同右
→注54

図版5-5 華蚤 上から
見れば四葉文 河南省
洛陽金村出土 同上
→注57

図版5-7 芝草をもつ仙人（羽人）
『中国銅鏡図典』→注52



図版5-6 博盤(加筆)
『中山王国文物展』
→注61

図版5-10 西王母 博局鏡に始
めて西王母の図像があらわれ
る 同右→注64

図版5-9 漢 禽獣博局鏡
『中国銅鏡図典』→注66

図版5-8 唐 双獣双鳥繞
花枝鏡 連弧文が内部か
ら外面に出た形を八つ
の花弁に見立てて八花鏡
と呼ぶ。『中国銅鏡図
典』→注68

陽神であろう。同時に月神、月弓（つきゆみ）の尊も作り出された。廣瀬都巽は、大日靈尊を天照大神とする(注69)。

天照大神が天の岩戸に隠れた時に「鏡を作らせた」という『古事記』の記事がある。『古語拾遺』はその注釈のようにみえる。

於是從思兼神議令石凝姥神鑄日像之鏡、初度所鑄少不合意(是紀伊國日前神也)次度所鑄其状美麗(是伊勢太神也)(是に於て思兼神議に從い石凝姥神（いしこりどめのかみ）をして日像之鏡を鑄しめ、初めて鑄る所を度るに少しく意に合わず(是れ紀伊の國の日前の神なり)次に鑄る所を度るに其の状美麗(是れ伊勢の太神なり))

これらの鏡は「日像之鏡」と呼ばれ、太陽を象る。初鋳の鏡は鋳上がりが悪く、紀伊の「日前神」とされる。第二番目に作ったのを伊勢太神という。天照大神のことであろう。

『日本書紀』垂仁天皇三年（紀元前二七年とされるが疑問）に新羅の使者が将来した鏡のことを「日鏡（ひのかがみ）」と呼んでいる。日本の古典の中では鏡と太陽の関係は明白だが、それは日本独自のものでは無く、本来、中国の鏡がそうだからであろう。

鈴鏡

『日本書紀』神功皇后五二年（三七二年とされるが疑問）九月に、百済の使が、七枝刀一口と七子鏡一面を献上した(注70)、という記事がある。七子鏡は外側に鈴のついた鈴鏡を想起させる。鈴の数により四～八鈴鏡と呼ばれる。この七子鏡は七鈴鏡（図6-1(注71)）ではないか。鈴の形は連珠文が外に飛び出して立体化したものにみえる。これは、たとえば光耀七乳四神鏡（図6-2(注72)）の乳が鈴になったもののようにもみえる。鈴は半球形の鈕ともよく似ているが、鈴の一つひとつを、地中を潜行し、扶桑の枝を昇る太陽の蕾とはみなせないか。

扶桑樹の原形とされる三星堆の神樹には花弁形の鈴がつく。萩原秀三郎氏は以下のように説明する。

太陽が出てくる扶木の下の湯谷とは何か。東西の果てを結ぶ地底には太陽のくぐり抜ける水脈があって湯谷といい、太陽が湯浴みし、ほとぼりをさますところなのです。巨大神樹の根方の蛇は水脈をあらわすともいえます。

さらに『淮南子』地形訓では、若木は建木の西にあって、若木の端に一〇個の日がある。その有様は蓮の花の如くであると記されています。三星堆の巨大神樹の蕾は、『淮南子』でいう蓮の花であり、実は太陽そのものを象徴するものであったのです。また、扶桑には日がそれを伝わって「登る」と書いてあり、

若木は赤い樹であり、赤い花をつけていると表現しているところから、この東西の巨木は太陽が昇降する木であることは間違いありません。（…中略）

図A（図6-3）は、三星堆出土の花弁形鈴で、蕾が開きはじめたばかりの花の姿をした鈴なのです。上部の花托の部分には鈕がつくようになっていて、四枚の花弁の中に花芯をあらわす舌が下がっています。この図と図B（図6-4）の図を見比べてみて下さい。図Bの神鳥は花の蕾を掴んで立っていますが、蕾の部分は図C（図6-5）の2の神樹の鳥が立つ蕾とも、この図Aの蕾ともそっくりな造形です。つまり、この花弁は太陽をあらわしているのです。三星堆出土の鈴には、花弁形鈴のほか、鳥形鈴、獣面鈴、鐸形の鈴などが出土しています(注73)。（※図A・B・Cの記号は付け替えた）

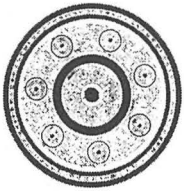
氏は青銅製の巨樹(注74)を扶桑神話と結びつけ、『淮南子』の記述から、赤い蓮の花を太陽とみなし、蕾が「鈴」の形をしている事に着目する。三星堆の「鈴」と対比すれば日本の鈴鏡の「鈴」もまた太陽の象徴とみなしうるかも知れない。また三星堆には「太陽輪（図2-4）」と呼ばれる銅製の輪があり、また太陽とみなせる図案のついた圓形銅挂飾（図6-7(注75)）もある。扶桑と太陽の花と鳥及びそれを射ようとする観の図は曽侯乙墓の漆図（図6-6(注76)）にも見え、類似の図は博山炉（図6-8(注77)）にも見え、画像石にも数多くある。

内行花文鏡・三角縁神獣鏡

内行花文鏡によく似た文様はすでに三星堆にある（図版4-15(注78)）。太陽型器とされる器に描かれるもので、これは神殿の蓋屋に描かれる「太陽芒紋」と似るとされる。これは弧が七つある。三星堆の銅の怪獣の耳にも同様の文様があるが、弧は六つである。これは内行花文鏡の文様に酷似している。太陽の光芒をあらわしているとみなせるが、それは同時に、連弧の部分が半ば隠れた太陽にもみえる。内行花文鏡は後漢に多い鏡だが、日本にも伝わっている（図4-14(注79)）。博局鏡に表された西王母は、三角縁神獣鏡で東王父と一対に描かれることが多い。『三国志』魏書三十、景初二年（二三八）に、魏が銅鏡百枚を卑弥呼に贈ったとあり、これが日本の三角縁神獣鏡と結びつけられた。辺縁の断面が三角のため、三角縁と呼ばれる。中国で出土しないこと、出土枚数が一〇〇枚を大幅に超えることから、中国製或いは日本製という議論がおこり、中国の工人が日本で作ったという説もある。大半が九寸以上の大鏡である。

図A

図版6-3 三星堆出土
の花弁形鈴→注73



図版6-2 光耀七乳四神鏡
『中国銅鏡図典』→注72

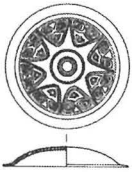
図版6-1 七鈴鏡 七鈴鏡の
七箇の鈴は鏡かもしれず、
太陽かもしれない。光耀
七乳四神鏡 『古鏡』→注71

図C

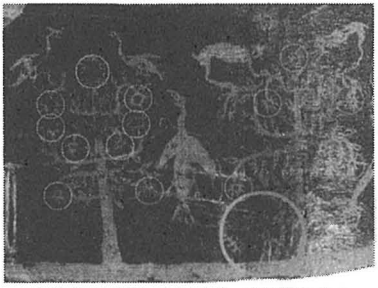
図版6-5 三星堆出土
神樹の鳥が立つ蕾
鈴と太陽は関連→注73

図B

図版6-4 三星堆出土
の花弁形鈴→注73



図版6-7 円形銅挂飾
円形銅挂飾の図案は
太陽かもしれない
『三星堆祭祀坑』
→注75



図版6-6 扶桑 太陽の花 弓を構える人
『曾侯乙墓特別展』→注76

図版6-10 拡大図 左

図版6-9 拡大図 右

図版6-8 博山炉 扶桑と弓を構
える人『フリーア美術館』→注77

おわりに

左右が逆に見える、太陽光を反射する、太陽から火を起こす等々の古人にとって不可思議な力により、鏡には思想的意味が付与された。九寸以上の鏡には悪霊の真の姿が映し出されると『抱朴子』は説く。そのため、これまで鏡は辟邪という観点から考察されることが多く、私自身も同様の考察を加えている(注80)。日本の古墳に副葬される三角縁神獣鏡に関して、菅谷文則氏は「九寸以上の鏡」に着目し、辟邪の役割を強調している(注81)。その通りであろう。しかし、鏡背には太陽と関連する文様や銘文を見出すことができた。何よりも円形の鏡そのものが太陽の形であろう。そして鏡自体に太陽信仰の持つ復活再生観念が投影されているのだろう。中国に限らず、古代の死生観は、死者が復活再生し、あの世で暮らすと想定されるものが多い。鏡を副葬する基本的な理由の一つに死者を復活再生させたい、という目的をあげることも可能であろう。

注

(1)『大英博物館 古代エジプト展』朝日新聞社、NHK編、一九九九、四五頁、新王国時代、十八王朝初期、前一五〇〇年頃、高二三・五㎝、鏡面最大径一三・二㎝、一八七頁、解説四四

(2) イアン・ショー、ポール・ニコルソン著、内田杉彦訳『大英博物館古代エジプト百科事典』原書房、一九九七、一一一頁、鏡

(3) 七角星紋鏡とされるが、この図形は太陽では？ 孔祥星『中国銅鏡図典』文物出版社、一九九二、一頁

(4) 高倉洋彰他訳『図説 中国古代銅鏡史』中国書店、一九九一、七四頁、銅華連弧文鏡の銘文の一例として紹介される。

(5) 解説末永雅雄、杉本憲司編訳『徐乃昌蔵中国古鏡拓影』第二分冊、木耳社、一九八四、一一八頁

(6)『長沙馬王堆一號漢墓』文物出版社、一九七三

(7) アロイス・リイグル著、長広敏雄訳『美術様式論 装飾史の基本問題』座右宝刊行会、一九四二

(8)『世界美術大全集』一五、中央アジア、小学館、一九九二、三八頁

(9) 日本にある内行花文鏡と十日信仰の関係から考察するものがある。http://blogs.dion.ne.jp/pentacross/宝賀寿男「隅田八幡鏡銘文についての補論と関係諸論」(『古代史の海』第五二号)に「日十」とは「十個の太陽」の意義で、その住処

たる扶桑の樹」とみえる。

(10)『古代エジプト文明三〇〇〇年の世界』京都文化博物館、二〇〇五、図版七六の解説。柄付き鏡 Bronzemirror 新王国時代高さ二五．〇〇㎝、幅一四．一〇㎝、下関市立美術館

(11) 前掲『大英博物館 古代エジプト展』解説四四

(12) 第一二王朝の壁画上のアンク。『エジプトの秘寶』1 講談社、一〇八頁

(13) 前掲『大英博物館 古代エジプト展』六五頁、末期王朝時代、前六〇〇年以降、Mirror with Hathor head

(14) 龍耳鑑（春秋時代）高さ三八㎝、口径七七㎝、譚旦冏他編『商周銅器』國立歴史博物館、一九六〇、八五頁

(15) 徐中舒『甲骨文字典』四川辞書出版社、一九八九、九三〇頁、監、三期佚九三二

(16) 前掲『中国銅鏡図典』一六一頁

(17) 火を取る凹面鏡、径七㎝、ぶらさげられる。堀晄他編『北方騎馬民族の黄金マスク展』旭通信社、一九九六、九一頁

(18) 北朝鮮平安南道中和郡出土、多鈕鏡、樋口隆康『古鏡』新潮社、七八頁

(19) 拙稿「救日祭祀と十日神話」、関西大学アジア文化研究センター紀要4号、二〇〇九年三月において、この内容をもう少し詳しく考察した。

(20) 民族藝術学会編「民族藝術」講談社、第一二号、一九九六

(21)『神話 祭祀与長江文明』文物出版社、二〇〇二、一七七頁、二号祭祀坑I号大型銅神樹

(22) 三星堆研究院・三星堆博物館編『三星堆研究』第一輯、天地出版社、二〇〇六、一四頁

(23) 拙稿「中国の死生観に外国の図像が影響を与えた可能性について—馬王堆帛画を例として」『東方宗教』第五十四号、日本道教学会、二〇〇七を参照。

(24) 杉本直治郎・御手洗勝「古代中國における太陽説話 特に扶桑傳説について」『民族學研究』、日本文化人類学会、vol. 一五、No. 三-四、三〇四～三二七頁

(25) 谷川健一他『太陽と月 古代人の宇宙観と死生観』小学館、一九八三

(26) 前掲『中国銅鏡図典』一頁

(27)『古鏡』新潮社、一九七九、二六頁

(28) 長さ八．四㎝、厚さ〇．三㎝、岡村秀典他『世界美術大全集東洋編先史・商・周』小学館、二〇〇〇、二八

(29) 松村一男、渡辺和子編『太陽神の研究・メソポタミアの太陽神とその図像』リトン、二〇〇二、Kassites 王朝時代（公元前一二世紀）的境界石及び Akkad 王朝時代的円筒印章

(30) 同上、Akkad王朝のNaram sin（在位公元前二二五四～二二一八）の戦勝紀念碑
(31) 前掲『中国銅鏡図典』二七六頁、尚方四神博局鏡他多数
(32) 前掲『古鏡』三七二頁、鏡銘分類表
(33) 嘉禾四年六月鏡（呉、二三五年）、銘文の全文は「嘉禾四年六月命作吾作明竟　服者萬年□年子孫　仙竟宜用之長□□有朱鳥武」。五島美術館蔵。前掲『古鏡』二二四頁
(34) 變形四葉獣首鏡、広東連縣出土、東晋時期、前掲『中国銅鏡図典』三七九頁。この銘文は多数。
(35) 上大山禽獣博局鏡、前掲『中国銅鏡図典』二九八頁
(36) 解説末永雅雄、杉本憲司編訳、木耳社、一九八四
(37) http://www.zgybsf.com/ZGWX/1798.htm、銘文は見日之光、天下大明
(38)『中華人民共和国古代青銅器展』日本経済新聞社、一九七六、一〇一頁「内清質以昭明」透光鏡　前漢（西漢）
(39) 径一九cm、前掲『中国銅鏡図典』一三五頁
(40) 透光鏡に似る。同二二七頁
(41) 同一九九頁
(42) 同一八五頁
(43) 同二三〇頁
(44) 同三六五頁
(45) 同三四〇頁
(46) 同三五七頁
(47) 杉勇編『エジプト美術』学習研究社、一九七二、九九、二九〇頁、魂を迎える2女神。「ここではバーの姿は、復活してオシリスとなった故王をあらわすため牡羊頭の鳥となっている。のぼる太陽の中に描かれたバーは魂の復活をあらわし…」とされている。
(48) ドイツ民主共和国ベルリン国立博物館（ボーデ博物館）蔵／東京国立博物館［ほか］編『大エジプト展』日本テレビ放送網、一九八八、二一〇頁、ネフェルイニの『死者の書』プトレマイオス朝時代、紀元前四～一世紀
(49) 前掲『中国銅鏡図典』二〇三頁、毋忘博局対称連畳草葉鏡の鈕。
(50)『四川漢画像磚』、四川美術出版社、二〇〇六、一九八頁、女媧画像磚、後漢
(51) 田辺勝美、前田耕作責任編集『中央アジア』小学館、一九九九、世界美術大全集、東洋編第15巻、三二頁
(52) 湯池主編『中國畫像石全集』5、陝西、山西漢畫像石、山東美術出版社、二〇〇〇、山西兪林古城灘墓門右立柱畫像
(53) 前掲『中国銅鏡図典』三二七頁、湖南長沙東漢中期墓
(54) 同二七一頁
(55)『中國古鏡の研究』岩波書店、一九五三、図版四の二

(56) 同八二頁
(57) 同八三頁
(58) 三国呉の人、赤烏(二三八～二五一)中に太子少保。
(59) 前掲『中國古鏡の研究』八四頁
(60) 同上
(61) 東京国立博物館他編『中山王国文物展』日本経済新聞社、一九八一、図版四四石製六博棋盤およびその拓本
(62) 前掲『図説　中国古代銅鏡史』八八頁
(63) 増川宏一『盤上遊戯』法政大学出版会、一九七八、九〇頁
(64) 前掲『中国銅鏡図典』二〇三頁、四川成都出土。鈕は亀、獅子（唐）などに変化していく。
(65) 前掲拙稿「中国の死生観に外国の図像が影響を与えた可能性について―馬王堆帛画を例として」において、月中の蟾蜍とされる図がエジプトの太陽中の聖甲蟲に類似することを指摘した。
(66) 前掲『中国銅鏡図典』三〇三頁、江蘇揚州王莽時期墓出土
(67) 重信あゆみ「古代中国における外国―エジプトの神、ベス神の影響―」阪神中哲談話会第三七九回発表資料参照
(68) 同五三六頁。唐、獣双鳥繞花枝鏡
(69) 考古学講座、第二巻『和鏡』雄山閣、一九二八、二頁
(70) 獻七枝刀一口、七子鏡一面
(71) 前掲『古鏡』三四〇頁。鈴の意味についての説明はない。
(72) 前掲『中国銅鏡図典』三五九頁
(73) 萩原秀三郎「中国の「柱立て」と太陽信仰」、諏訪春雄編『巨木と鳥竿』勉誠出版、二〇〇一、遊学叢書一六、二九～三〇頁
(74) 安田喜憲主編『神話祭祀与長江文明』文物出版社、二〇〇二
(75) 前掲『三星堆祭祀坑』三〇〇頁
(76) 東京国立博物館編『曾侯乙墓　特別展』日本経済新聞社、一九九二
(77)『フリーア美術館』一、講談社、一九七一、一四頁、博山香炉、周時代末～漢時代初め
(78) 四川省文物出版社研究所編『三星堆祭祀坑』文物出版社、二〇〇二、三〇〇頁
(79) 前掲『古鏡』図録68　長岡京市長法寺南原古墳　東京国立博物館
(80) 拙著『魂のありか』角川書店、二〇〇〇、五九～六〇頁
(81)『日本人と鏡』同朋舎出版、一九九一、一九〇～一九二頁

※拙稿は二〇〇八年一〇月二五日に臺灣台南市致遠管理学院での内容を要約。

開かれた国際シンポジウム「国際学術研討会―東アジア文化の発生・変遷・交流―」において「鏡與太陽信仰―從東亞的鏡的圖案談起―」という題目で発表した内容（参加者に配布された予稿集に収録）にもとづく。拙稿はその内容から中国語の要旨を省略し、漢文の訓読を補い、地名等の中国語表記を日本語になおしたほか、若干の加筆修正をしている。また拙稿の内容の一部は『日本文化のかたち百科』（宮崎興二編、丸善、二〇〇八年一二月一五日発行）、四七四～八一頁に「中国の鏡」として使用している。

※中国語のレジュメへの翻訳に当たっては顧春芳氏のお手を煩わせた。感謝したい。

※本稿は平成二十年度科学研究費補助金、基盤研究（C）「中國における太陽とロータスと鳥の圖像的イメージと神仙思想」の研究成果の一部である。